

フランス語の二次的述定における現在分詞 動詞性 と形容詞性の混交

著者	宮本 直規
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第328号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59397

みやもと なお き 宮 本 直 規

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 328 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学 位 論 文 題 目	フランス語の二次的述定における現在分詞 —動詞性と形容詞性の混交—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 阿 部 宏 教 授 後 藤 斉 准教授 今 井 勉 准教授 ヤン・メヴェル

論 文 内 容 の 要 旨

1. 目的

現在分詞は、その名称 一分詞 (participe) — が示す通り、形容詞的性質と動詞的性質を分かち持つ (participer). そのため、形態的に良く似た表現形であるジェロンディフ (1-b) との比較においては、現在分詞節 (1-a) は「形容詞的」機能を持つものとして扱われ (LE GOFFIC (1993), HALMØY (2003)), その一方で (2) の文における現在分詞は、競合する関係節や不定詞と同じく「動詞的」な性質を表わしているものとして扱われる (朝倉 (2002) LE BIDOIS ET LE BIDOIS (1971) WILLEMS et DEFRANCQ (2000)) ;

- (1) a. Sortant du cinéma, Paul a rencontré Marie.
b. En sortant du cinéma, Paul a rencontré Marie.
(2) Je l'ai vue dormant paisiblement dans mon lit.

しかしながら、ある場合にその現在分詞を「形容詞的」とし、また別の場合に「動詞的」とどちらか一方の性質に帰属させれば現在分詞の性質が説明されたことになるわけではない。このことを示す以下の例を見てみよう ;

- (3) a. ?Je l'ai vue marchant.
b. Je l'ai vue qui marchait.
c. Je l'ai vue marcher.
d. Je l'ai vue triste.

一連の文の中で、関係節 (3-b)、不定詞 (3-c)、形容詞 (3-d) を用いた文に対し、現在分詞 (3-a) を用いたときにのみ容認性が下がってしまう。ところがこの (3-a) に補語 « dans la rue » や « avec leurs fusils » を付加すると容認性の問題は解消される；

(4) Je l'ai vue marchant dans la rue / avec leurs fusils.

上記構文に現われる現在分詞のみならず、通常現在分詞は何らかの補語を必要とし現在分詞単独での使用は避けられる。この補語の要請の理由として、(3) が示す通り、「動詞的性質」(関係節・不定詞) や「形容詞的性質」のどちらか一方からの影響を想定することはできない。

この現在分詞の単独使用に関する制約には、現在分詞に固有の特徴が潜在していることが予想され、それを動詞性と形容詞性の混交の問題として考察する。

本論は以下の二つを目的とする；

- i) 現在分詞のこの混成的二面性という特徴を明らかにし、補語要請の要因を探る。
- ii) この特徴が見出され易い現在分詞の幾つかの構文を、競合する類似表現と比較・分析することで各々の構文内での現在分詞に固有の機能を明らかにする。

2. 考察対象

フランス語の現在分詞は主に以下の用法の中で現われる。本論では上記の目的を果たすために、二次的述定を構成する (5)～(8) の構文を分析対象として選択する (ただし (6) は (5) との対照においてのみ取り上げる)；

- (5) Sortant du cinéma, Paul a rencontré Marie. (=1-a)
- (6) En sortant du cinéma, Paul a rencontré Marie. (=1-b)
- (7) Le bus freinant brusquement, elle tomba.
- (8) a. Je l'ai vue dormant paisiblement dans mon lit. (=2)
b. La voilà dansant avec Paul.
- (9) J'aime l'acteur jouant Hamlet.
- (10) L'amour pour le roi allait croissant. (朝倉 (2002:40))
- (11) Je ne sais rien touchant cette affaire.

(5)～(8) の構文を選択する正当性は以下の事由による。構文の弁別基準に用いた「二次的述定」という概念にどのような定義を与えるかという問題はそれ自体で繊細な議論が必要とされるが (HAVU et PIERRARD (2008a), (2008b)), ここでは『属辞タイプで、統辞 - 意味的な次元において非 - 定形である』という NEVEU (2000:121), および『統辞的には統合された地位を持つにもかかわらず、意味的には文の同じ内部において文的内容を表わす』という CADIOT et FURUKAWA (2000:3) の記述を採用することにする。前者は二次的述定の内部での統辞的規定であり、後者はそれに加えて二次的述定に係ることになる上位述定との関係—『統辞的には統合された地位を持つ』—をも含む。結局、二次的述定とは属辞的述定という文的内容を表わすシーケンズが、より上位の文内 (節内) に統合されたもの、ということになる。この「属辞的述定」「文的内容」ということから、(9)～(11) は二次的述定とはみなされないことになる。一方、(5)～(8) の構文で用いられている現在分詞は、先述した現在分詞の二つの性質—動詞性と形容詞性—を顕著に表わすものとなる。というのも述定関係とはそもそも主辞と述辞により構成され、述辞とは典型的には動詞句もしくはコピュラを伴う形容詞や前置詞句だからである。それゆえ現在分詞の動詞性と形容詞性の混成を検討する場合に、この二次的述定による構文の弁別は妥当なものと考えられよう。

3. 構成と内容

先に掲げた目的の i) は全ての章で多かれ少なかれ検討されるが、特に第1章で論じられる。また目的の ii) は第2章～6章で論じられる。

第1章：本論全体の前提となる議論として、本論で取り上げる全ての構文に共通する補語要請の問題を取り上げる。この問題を通じて、二次的述定内での現在分詞それ自身の持つ特徴を考察することになる。これまで現在分詞が何らかの補語を必要とすることは指摘こそされてきたものの (GETTRUP (1977), KLEIBER (1988), HALMØY (2003), MILLER et LOWREY (2003)), それは何に起因するのかは考察されてこなかった。そこで本章ではこの問題を取り上げ、それを現在分詞自体が有する以下の特徴を想定、検証することで問題の解決を試みる：

現在分詞の特徴：

- ・本来的に時間的概念と結び付いた動詞を非時間化する段階を持つ
- ・時間的概念と結び付いた動詞のプロセスの内部を切り取り、その内部を均質化する

こうした特徴により現在分詞の表わす事態は時間軸上から外され、本来の動詞プロセスの内部部分として切り出されることになる。とりわけ前者の特徴により、現在分詞は時間的概念を喪失し、動詞本来の有していた出来事性が低下することになる。補語はこの出来事性の低減を擬似的に回復するために必要となるものとする。さらに完了動詞が現在分詞となった場合には、二番目の特徴により、切り出されたプロセスの内部は均質かつ非有界的なものとなるが、補語により具体的出来事性を付与されることで、その均質化された内部に特定の値が設定されることになる：

(12)a. ??Parlant, Maurice s'approcha de moi.

b. (?)Bafouillant, Maurice s'approcha de moi.

上例が示すように、両者とも完全な容認性は得られないものの、(12-b)は(12-a)に比して相対的に高い容認性が得られる。「bafouiller」は、「parler」と比べて動詞自体が表わす意味概念の外延が小さい。つまり「parler」の表わす行為の様はより広範な意味を潜在的に有し、更に下位の意味を矛盾なく付加することが可能となる。逆に言えばそれらの下位の意味—「大声で話す」「ぼそぼそ話す」等—がなければ出来事としての特定の代表値が未決定なままになってしまう。一方「bafouiller」はその意味の外延が小さく、既にして具体的・特定の動詞である。そのため非時間化されることで脱出来事化され、かつ任意の内的部分として切り出さる均質化されたプロセスは、どの一部であろうと元々のプロセスの代表値になりやすい。

上述のように、補語の要請の問題は現在分詞それ自体が有する特徴から基本的な説明は可能となる。しかしその一方で、補語による出来事性の快復は、現在分詞節と上位述定との間での意味的・論理的関係構築の必然性が強ければ強いほど、補語要素が必要とされる度合いも強くなる。それゆえ現在分詞の内的特徴とは別の要因—上位述定との意味的・論理的関係構築—も複合的に関わってくる。

次章以下では、現在分詞節が上位述定との間に取り結ぶ関係を、分詞構文、絶対構文、直接目的補語属辞構文の中で検討していくことになる。

第2章：(5)に代表される「現在分詞構文」を取り上げる。この構文が主節に対していかなる意味を担うのかという問題は、これまでのところ諸家様々に意味のラベル付けがなされ、必ずしも共通見解が得られていない。本章では主にジェロンディフ (6) との対照比較により、以下のことを明らかにする：第一に、現在分詞の非時間的性質と文の線形性が、現在分詞節の主節に対する意味の決定に大きな役割を果たしているということ、第二に現在分詞節は主節に対して意味的従属性が弱いこと。

第一の点について言えば、現実には生起する二つの事象を A, B, それぞれの事象に対応する言語要素

を a, b と表記すると、現在分詞構文は以下の二つに大別することができる；

- ・時間的－論理的連続性が保たれる場合；

現実の生起 A → B

言語表現の現われ a (主節) + b (現在分詞節) / a (現在分詞節) + b (主節)

- ・時間的－論理的に非連続な場合；

現実の生起 A → B

言語表現の現われ b (主節) + a (現在分詞節) / ? b (現在分詞節) + a (主節)

現在分詞はそれ自体に固有の時制を持たず、また非時間化された概念を表わすため、文の線形的配列という拘束を受けると、ほぼ自動的に主節との時間的順序付けが強制される。この線形配列が付与する時間的順序付けに従って、連続性のある場合では時間的継起ないしは論理的因果関係という意味効果が自然と読み取られることになる。

一方、線形配列の拘束力に由来してまず自動的に目指される連続性解釈が、意味・論理的に整合性が得られない場合には、その解釈の不可能性から、この線形性の拘束が課す時間的順序付けは無効化される。このとき現在分詞の叙述内容は主節に対していかなる時間的関係をもたないことになる。現在分詞はそもそも非時間的概念を表わすことから、主節が描写する事象の属している時間軸上で関係付けが行われる必然性がなくなり、話者の意見・判断過程など主観的な内容を表わすことになる。この場合、現在分詞は後置されるが、それは主節（前置）の内容・言表行為に対する発話者の事後的介入の現われを反映する。それゆえ前者の連続性のある場合に比べれば、文の線形性に対応していない分だけ不自然な用法であると言え、事実、非連続の用法の方が相対的に稀なものである。

第二の点は、特に連続性が保たれる場合で顕著なものである。現在分詞が補語の充足を持ってはじめて主節との間で意味関係が構築されるのに対し、ジェロンディフには補語の要請は関わらない；

(13) a. En fumant, Paul m'a écouté, puis il m'a demandé de la relire.

b. ??Fumant, Paul m'a écouté, puis il m'a demandé de la relire.

それゆえ現在分詞はジェロンディフと異なり、補語要素の充足を持ってはじめて主節との意味関係を構築することになるが、それは二つの事象 A, B の間での自然な推論が導かれる限りにおいて成されるに過ぎない。この推論の成立の可否を文の書き換えによって検証し、現在分詞の意味的従属性の弱さを示す。

また現在分詞がジェロンディフと比べて否定に置かれやすいことも、第1章からの知見一脱出来事性一から説明される。否定とは出来事ではなく事実であるからである。

第3、4章はこの第2章と内容的に重なり合う問題が取り上げられる。

第3章：第2章に引き続き現在分詞構文を取り上げるが、特に現在分詞節の意味上の主語の問題を扱う。現在分詞の意味上の主語は「主節主語と同一である」(GIRODET (1981), GREVISSE (1986), WAGNER et PINCHON (1991)), あるいは「最も近接する名詞句」「最も際立った名詞句」(HALMØY (2008)) であるとされる。本章では特に後者の主張を批判的に検討するが、前者の「主節主語と同一」という規範に対しても反例を取り上げて検証する。結局、現在分詞節の意味上の主語の決定には厳密な統辞的・意味論的な規則を打ち立てることが難しいことが明かされる。

またジェロンディフに比べると、現在分詞は意味上の主語の選択に対しての厳しい制約を持つが、その理由を第2章で得られた知見一現在分詞の主節に対する意味的従属性の弱さ一により説明する。現在分詞節は主節との意味関係の構築の動機が弱いのにに対して、ジェロンディフは積極的に主節と意味関係を取り結ぶ性質を持ち、節内で欠如している（意味上の）主語要素は、この主節との意味的・論理的

関係付けの要請に従って、主節内（または発話状況内）から積極的に走査されるのである。

第4章：(7)の現在分詞絶対構文を取り上げる。この構文の場合でも分詞構文の場合同様、主節に対する意味効果の点で諸家に一致は見られない；「原因」解釈のみを認める LE BIDOIS ET LE BIDOIS (1971), 「原因」「条件-仮定」を認め「様態」を排除する MAUGER (1968) など意味効果のラベル付けは曖昧なままである。本章でも第2章で用いる連続か非連続かという弁別により絶対構文で生じる意味効果を検討し、この弁別が有効なものであることを再確認する。連続性が保たれる場合では、多くは現在分詞節が前置され継起性に基づく原因解釈が優勢となる；

(14) Le travail de l'imprimerie se raréfiant, Jean fut mis à pied pour une semaine.

非連続の場合には現在分詞節が後置されることが多く、「同時性」「様態」の解釈が中心的なものとなる；

(15) Rambert était à une extrémité du comptoir et leur (=Rieux et Tarrou) faisait signe du haut de son tabouret. Ils (=Rieux et Tarrou) l'entourèrent, Tarrou repoussant avec tranquillité un voisin bruyant.

ただし前置される場合であっても、行為主間に〈部分 - 全体〉の関係が見出される場合には「同時性」「様態」「説明」の解釈も引き出される：

(16) Sa bouche projetant ses volutes de fumée, elle écoutait la radio.

二つの主語の間で成立している〈部分 - 全体〉関係が、行為自体にも延長されることにより、時間的並行性に基づく意味が強化されるからである。

第5章：(8-a)の〈N1-V-N2-Vant〉型の構文を論じる。この構文で主動詞(V)が知覚動詞の場合に現在分詞(Vant)は関係節や不定詞を用いて置換可能であることは良く指摘されてきた(HATCHER (1944), LE BIDOIS et LE BIDOIS (1971), WILLEMS et DEFRANCQ (2000), 朝倉 (2002))；

(17) Je la vois cousant auprès de sa fenêtre. (朝倉 (2002:365))

(18) Je la vois coudre auprès de sa fenêtre. (ibid.,)

(19) Je la vois qui coud auprès de sa fenêtre. (ibid.,)

しかし不定詞と関係節が対比されることはあっても、現在分詞節との統辞的・意味的相違を詳細に検討した研究はこれまでのところ存在していない。そこで本章では各構文の統辞的・意味的相違を明らかにし、(17)の〈N1-V-N2-Vant〉型構文では三つの構造—「I: 名詞修飾」「II: 不定詞に類する動詞句」・「III: 主節に関わる付加的要素」—を想定する。この構造的多様性により、〈N1-V-N2-Vant〉構文を取りうる主動詞が〈N1-V-N2-Inf〉構文の場合と比べて多種にわたることの説明を試みる。特にIIIの構造に基づく意味解釈では、知覚の真の対象がN2の指示対象である実体であり、その実体に関する知覚経験の報告に発話の重点が置かれることになる。そしてその知覚経験が成立する背景的描述として〈N2-Vant〉によって示される事象が付加的に述べられる。そのとき現在分詞によって描写される事象は、知覚の有無とは無関係に現実内にすでに定まったものとして表現されるという意味特徴が顕現することになる。このIIIを反映した解釈が〈N1-V-N2-Vant〉型構文において優勢となり、「contempler」、「fixer」、「épier」、「admirer」、「apercevoir」、「découvrir」など多くの知覚動詞が〈N1-V-N2-Inf〉構文を受け入れないのに対し、〈N1-V-N2-Vant〉構文を認可することが説明可能となる。

また〈N1-V-N2-Adj〉という形容詞を属辞要素に持つ構文とも比較し、現在分詞と形容詞の近接性を任意属辞という観点から論じる。次に現在分詞の有する特徴「非時間性」および「プロセスの内的切り取り」がもたらすアスペクトに基づく意味特性を考察し、その動詞的側面を検討する。

第6章：第5章で取り上げた構文と共に、目的補語属辞構文とみなされる(8-b)の〈voilà + N + Vant〉という提示表現と共起する現在分詞節を論じる。第5章での考察結果がこの提示表現でも有効

であることが示される。ここでの現在分詞は機械的操作としては関係節と置き換え可能だが、名詞修飾の関係節とも提示関係節とも異なる現在分詞独特の意味を生じしむ。それを「事態に対する認識的固定性」として考察する。これは現在分詞節の叙述する内容が、現在分詞の非時間的性質に基づいて、主節事態の帰属する時間軸上にはっきりと定位されないことの現われとなっている。この意味解釈は第5章で扱った〈N1-V-N2-Vant〉型の構文での構造(III)「主節に関わる付加要素」の場合にも共通することを指摘する。また〈il y a + N + Vant〉という提示表現にも触れる。

論文審査結果の要旨

本論文は、フランス語の現在分詞について、現在分詞と補語、現在分詞節と主節、現在分詞とジェロンディフ、現在分詞の意味上の主語、現在分詞絶対構文と主節、現在分詞と知覚動詞、提示表現中の現在分詞などの分析を通して、その動詞性と形容詞性との関係を考察したものである。

第1章では、現在分詞が補語を要請する現象に着目し、これは現在分詞における出来事性の低下を擬似的に回復するためであると主張する。

第2章では、現在分詞節と主節との時間的・意味的關係について、主として現在分詞節とジェロンディフとの比較において分析し、現在分詞は主節に対してより意味的従属性が低いことを指摘する。

第3章では、現在分詞節の意味上の主語の問題が扱われる。主節の主語が現在分詞の意味上の主語となるという従来の説に対し、反例を多数あげて、現在分詞の意味上の主語の決定には厳密な統辞論的・意味論的規則は存在しないことを述べる。また、この点でもまた、ジェロンディフに比べて現在分詞は意味的従属性が低いことが検証されたとする。

第4章では、現在分詞絶対構文と主節との意味的關係が分析される。分詞節が前置の場合は継起性に基づく原因解釈が優勢で、後置の場合は同時性や様態の解釈に傾くこと、また分詞節と主節のそれぞれの主語が「部分－全体」の関係になっている場合は、同時性、様態、説明の意味的關係性が生じる、という興味深い指摘がなされている。

第5章では、独立文中にあらわれる現在分詞について、その機能において類似する不定詞節との比較において分析がなされる。ここで、現在分詞の場合は事態は現実内で起こっていることであるのに対し、不定詞節の場合はそうではない、という重要な指摘がなされている。

第6章では、「Voilà (Il y a) + 名詞 + 現在分詞」タイプの提示表現中の現在分詞の機能が扱われる。類似の表現である提示関係節の場合とは異なり、現在分詞節の事態は、必ずしも発話時点において展開中である必要はない、という観察結果が指摘され、これは非時間化という現在分詞の機能自体に由来するものである、と主張される。

現在分詞がとりうるこれら様々な構文の分析をつうじて、現在分詞は、本来的に時間概念と結びついた動詞を非時間化し、動詞のプロセスの内部を切り取り、それを均質化して提示する、という機能であることが最終的に結論づけられる。

本研究は、フランス語現在分詞、および関連して英語の現在分詞に関する先行研究を十分に踏まえた上で、多数の具体的事例を収集・分析し、これら先行研究を慎重にまた説得的に相対化し、フランス語現在分詞の機能について独自の仮説を提示したものである。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。